比較帝国史研究会（2009 年 9 月 3 日）

共和制の帝国：ソ連に帝国論を適用するための試論

池田嘉郎（新潟国際情報大学）

１．近現代における帝国

◆「帝国」の定義は難しい

・最大公約数的理解：広域的で多元的（法、文化、宗教、民族 etc.）（cf.「多法域性」松里）。だが、このような統治秩序は近代までむしろ基本。帝国プロパーの説明としては不十分（cf.「複合国家」Gustafsson）。

・近代以降に時期を絞って、帝国の輪郭を明らかにしようとするならば、①支配の性格、②多元性の性格、の二つを軸にして次のような整理ができるのではないか。

①支配の性格：帝国は社会契約論に基づかない

②多元性の性格：単なる複合国家、多民族国家ではなく、多元性が支配の正当性の重要な要素をなす（cf.「大一統」王柯）。

	社会契約的支配	非社会契約的支配
単なる多元性	結果としての多民族国家	権威主義的な多民族国家
多元性＝正当性	意識的な多民族国家	帝国

・さらに、近代以降の文脈に限ってみるならば、帝国とはまた共和制のネガでもある。

◆フランス革命の二つの挑戦

①人民主権（社会契約論）　（⇔帝国：非社会契約的支配）

②均質なネイション　（⇔帝国：多元性、社団国家）

・共和制：領域国家の全住民をネイションとして均一化；際立った動員能力（ナポレオン軍）

・帝国は共和制と対蹠的な存在；第一次世界大戦に至るまで基本的な統治秩序であり続けるが、共和派からの批判の対象に；共和制の動員能力を横目で見ながらその部分的な取り込みを模索（国民原理の剽窃：ex. ロシア帝国の官製国民主義；ハプスブルク帝国の二重帝国化）

◆20 世紀の帝国

パターンＡ：帝国の崩壊→コア地域の共和制化

・オスマン帝国（→トルコ共和国）；ハプスブルク帝国（→諸共和国）

パターンＢ：帝国の維持＋コア地域の国民国家化＋周辺地域の二級国民化

・イギリス帝国；日本帝国　（cf.「国民帝国」山室）

パターンＣ：帝国の崩壊→共和制による帝国の再編

・ロシア帝国（→ソ連邦）；清（→中華民国→中華人民共和国）

※ソ連は①非社会契約（一党独裁）、②多元性＝正当性という点で帝国。他方、最も共和制原理を徹底的に活用した帝国でもある。共和制の帝国は民主主義の帝国、ナショナルな帝国でもあるが、ここでは共和制という「装置」にこだわりたい。帝国のアンチとしての共和制を用いて帝国の再編を実現するというソ連のパラドクスを考えてみたいからである。

２．ソ連形成の第一段階：共和制による帝国の再編

◆ロシア帝国からソ連邦に：諸レベルの共和国の複合体として再生

a）帝国周縁部：独立共和国（ウクライナ、ベラルーシ、グルジア、アルメニア、アゼルバイジャン）；後 3 者はザカフカース連邦共和国に（1922 - 36）

b）帝国内奥部：ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国（RSFSR）の成立、その一部としての自治共和国（バシキール他）、さらに自治州（チュヴァシ他）

◆二つのルール（マルクス主義のイデオロギーと帝国統治のプラグマチズム）

①発展段階論：自治州→自治共和国→独立共和国

②ロシア本土の一体性：タタールや沿ヴォルガ・ドイツ人も自治共和国のみ

◆ソ連結成（1922）後も共和国の増殖は続く

・中央アジア：トルケスタン自治共和国からウズベク共和国が「独立」（1925）etc.

・自治州：文化・産業の発展により自治共和国に

　1923 年 4 月：自治州代表 5 名により、自治共和国への改組要求（高橋）

◆コレニザーツィア（土着化）の枠組としての共和国

・憲法、政府、世俗教育；行政と教育の場で現地語使用

・アファーマティヴ・アクション帝国（Martin）か？根底にはボリシェヴィキのイデオロギー

◆近代化戦略としての共和制の帝国

スターリン「マルクス主義と民族問題」（1913）:「ナーツィア（…）の基盤にあるのは、言語・**領土・経済生活**の共同性であり、さらにまた、文化の共同性として現れるところの心理的様式の共同性である」（⇔オーストリア・マルクス主義の文化的自治）

・領土の重視：生産の重視（マルクス主義）

➡領域を画定し、その住民をナーツィアに鋳直し、最大限の動員を図る

※広大なユーラシア大陸で多様な生活条件の下にある諸住民集団を、発展段階論に沿って整理。全ての集団を「進歩」の道程に引き込むプロジェクトとしての共和制の帝国。そもそも共和制という概念自体が、「反専制」「進歩」という歴史的・時系列的な価値を負荷されている。

※第一次世界大戦により、住民の均質化、政治参加と主体化、最大限の動員といった現象が広まる。戦後の全ヨーロッパ規模での民主主義ブーム（Mazower)。非ボリシェヴィキ系の民族指導者の間にも、ボリシェヴィキの「共和制」創出を受け入れる余地あり。

３．ソ連形成の第二段階：帝国秩序の確立

◆歴史の終わり

・1930 年代半ば：社会主義建設の達成、「人類史の本史」→「永遠」の感覚（パペルヌイ）；現状の絶対化、超歴史化

・民族の理解に関する本質主義（cf. 宇山）；民族文化の固定的イメージ

「生活は楽になった。生活は楽しくなった。老人たちに若さが戻り、90 歳のジャンブール〔カザフ人、1846 - 1945〕や 80 歳のスレイマン・スタリスキー〔レズギン人、1869 - 1937〕が 18 歳の若者のように歌い出した（…)。諸民族の偉大で揺るぎなきスターリン的友好の王国が到来した」。（トゥレポフ『革命と民族』誌、1936 年 10 号）

◆ソ連市民（公民的ネイション）

・各共和国市民は同時にソ連市民

・ソ連市民とは「1 億 7000 万の友好的、多民族的、真に人間的な集団の、完全な権利をもち、自由で、幸福な構成員である」（ヴォーリン「ソ連市民」、『アジテーター必携』1938 年 5 月）

◆各共和国市民（エスニック・ネイション）

・ソ連全体に共通のモダンな側面＋民族的な個性

・一例としてのスポーツ。1936 年 6 月のソ連中央執行委員会民族会議幹部会で、ウズベク・トルクメン・タジク共和国のスポーツ振興が議題に：都市住民、ヨーロッパ系が主に参加。1935 年の国家技術審査合格者は、タジクで 2800 人中現地民族は 604 人、トルクメンで 8597 人中 1317 人；女性の参加の低さ。トルクメンの女性合格者 916 人中 32 人。「民族共和国での身体文化の発展、身体文化への女性の思い切った引き込みを妨げている、過去の遺物としての偏見」に注意を向ける；民族的な種目の発展に力を注ぐ（拳闘や曲乗り）（『革命と民族』誌 1936 年 7 号）

・1939 年 7 月 18 日：全連邦身体文化愛好者の日。赤の広場で 4 万人のパレード。健康・労働・国防の手段、「レーニン＝スターリン的民族政策の勝利」（スネーゴフ）

◆スターリン憲法（1936)：共和国単位の帝国の仕上げ

・ザカフカース連邦共和国の解消：グルジア、アルメニア、アゼルバイジャンは直接ソ連に加入

・自治共和国から共和国に：カザフとキルギス

・自治州から自治共和国に：コミ、マリ、カバルダ＝バルカル、北オセチア、チェチェン＝イングーシ

◆共和国の人格化
・『夕刊モスクワ』1936/11/23：「平等な中の第一位」（RSFSR）、「豊穣の共和国」（ウクライナ）、「西部国境にて」（白ロシア）、「花咲くアイアスタン」（アルメニア）、「黒い黄金の国」（アゼルバイジャン）、「われらの祖国の真珠」（グルジア）、「白い黄金の国」（ウズベキスタン）、「第三の石炭基地」（カザフスタン）、「太陽の国」（トルクメニア）、「獲得された幸福」（キルギスタン）、「復活した人民」（タジキスタン）
・「受勲共和国」：第 7 回（1935）連邦ソヴィエト大会から第 8 回（1936）大会の間にアゼルバイジャン、グルジア、ベラルーシ、バシキール、アブハジア、チュヴァシがレーニン勲章を受勲

◆ロシア連邦共和国とロシア人
1930 年代～：ロシア人・ロシア文化の優位性が強調される
・帝国支配の戦略；共和国の人格化・個性化の一環でもある
・RSFSR（無機的）→われわれの共和国は多民族的であるが、同時にロシア民族の名を冠してもいる（カリーニン、1937 年 1 月の第 17 回全ロシア・ソヴィエト大会）

※スターリン時代：モダンの後。有機体的集団イメージや家父長的・権威主義的な共同体イメージなど、「前近代」的なイメージが強まる。帝国の先祖返り的な側面。

４．共和制の帝国と境界線
◆国内の境界線
1924 年 6 月、RSFSR 自治共和国内務人民委員第 1 回協議会
・セルギエフスキー（RSFSR 内務人民委員部参与）：自治共和国間の連携の欠如。西欧諸国同士と同じ。他方、犯罪者は自由に国内の境界線を行き来する。
・マメドベコフ（ダゲスタン代表）：他の共和国の捜査機関が国境線まで犯罪者を連れてきて、それで終わりにしてしまう。240 人が放たれ、郡の犯罪発生率が高まった。
➡ソ連内における境界と越境の意義は？

◆東方国境における共和制の波及
・ヒヴァ汗国とブハラ汗国→人民ソヴィエト共和国（1920 - 24）
・モンゴル人民共和国（1924 成立）；トゥヴァ人民共和国（1926 - 44）
・新疆：盛世才の民族文化振興路線（1933 - 37）
・カザフとキルギスの共和国への昇格：中国、ペルシア、アフガニスタンを見据える（対英）

◆西方国境における共和制の波及
・第二次世界大戦後の東欧：人民共和国
※直線的歴史認識を負荷された共和制という枠組の輸出;軍事力による帝国拡大とは別の次元で、

理念・制度の輸出（知的な次元での国際公共財？）；資本主義諸国のマルクス主義的知識人、植民地の独立運動にも波及していく

むすび

※民族的個性をもった諸共和国の複合体としてのソ連。動員という 20 世紀の要請と、発展程度の異なる諸住民集団の共存という 20 世紀以前的なロシアの実態との両方に対応。1980 年代後半の帝国中枢の混乱により周縁部の共和国は離脱。だが、現在のロシア連邦にもその構造は引き継がれる（自治共和国は全て「共和国」となった）。ともかくも社会契約的支配に基づいている点で、現在のロシア連邦は「共和制の帝国」から「意識的な多民族国家」に移行しかけている。

参考文献

ГАРФ [ロシア連邦国立アーカイヴ]. Ф.Р-393（RSFSR 内務人民委員部）
«Вечерняя Москва» [夕刊モスクワ]
«Революция и национальности» [革命と民族]
«Спутник агитатора» [アジテーター必携]
В. Паперный. Культьура два. М. 1996 [パペルヌイ『文化 2』]
РСФСР. М., 1938 [『RSFSR』]
H. Gustafsson, “The conglomerate state: A perspective on state formation in early modern Europe”, *Scandinavian journal of history*, Vol.23, Issue3, 1998
M. Mazower, *Dark Continent: Europe’s twentieth century*, New York, 1998
T. Martin, *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*, Ithaca, 2001
秋田茂『イギリス帝国とアジア国際秩序――ヘゲモニー国家から帝国的な構造的権力へ』、名古屋大学出版会、2003 年
宇山智彦「旧ソ連ムスリム地域における「民族史」の創造――その特殊性・近代性・普遍性」、酒井啓子、臼杵陽編『イスラーム地域の国家とナショナリズム』、東京大学出版会、2005 年
王柯『20 世紀中国の国家建設と「民族」』、東京大学出版会、2006 年
『スターリン全集』第 2 巻、大月書店、1952 年
清水由里子「カシュガルにおけるウイグル人の教育運動（1934 - 37 年）」、『内陸アジア史研究』第 22 号、2007 年
高橋清治「ソヴェト国家と諸民族――自治共和国、自治州と民族問題人民委員部の解体」、『両大戦間期ロシアの政治と文化の歴史的考察』（科研費報告書、代表磯谷孝、2001 年）
松里公孝「境界地域から世界帝国へ――ブリテン、ロシア、清」、松里公孝編『講座スラブ・ユーラシア学 3　ユーラシア――帝国の大陸』、講談社、2008 年
山室信一「「国民帝国」論の射程」、山本有造編『帝国の研究――原理・類型・関係』、名古屋大学出版会、2003 年